

BARRIE

QUALITY STREET
THE ADMIRABLE
CRICHTON &
MARY ROSE

SAWAMURA



KENKYUSHA ENGLISH CLASSICS

Y. OKAKURA AND S. ICHIKAWA

GENERAL EDITORS



KENKYUSHA ENGLISH CLASSICS

研究社英文學叢書



昭和三年六月十七日 印刷

昭和三年六月二十日 發行

主 幹 者 岡 倉 由 三 郎

主 幹 者 市 河 三 喜

發行兼印刷者 小 酒 井 五 一 郎
東京市麴町區富士見町六丁目五番地

印 刷 所 研 究 社 印 刷 所
東京市牛込區神樂町一丁目二番地

發 行 所 研 究 社

東京市麴町區富士見町六丁目五番地
電話 九段四〇二・四〇三番
振替 口座東京二八六〇一番



非 賣 品



Kenkyusha English Classics

QUALITY STREET,
THE ADMIRABLE
CRICHTON & MARY ROSE

BY

JAMES MATTHEW BARRIE

WITH INTRODUCTION AND NOTES

BY

T. SAWAMURA

ASSISTANT PROFESSOR OF ENGLISH LITERATURE IN THE IMPERIAL
UNIVERSITY OF TOKYO

TOKYO

KENKYUSHA

1928

序

今度の註釋は終始輕快な氣分で書き終ることが出來た。それは本文を教科書に使つて一二度教室の風に當てゝあるので、大部分難點が解決してゐたためと、Barrie の戯曲の有する魅力が、常に自分を愉快に働かしてくれたからである。それに誰もがまた鋤を入れない近代文學の處女地を開拓して、その面白味をさういふ風に説明すれば、讀者に徹底させることが出来るかと苦心することは、かういふ註釋を書く者にのみ與へられた樂みである。従つて時にはあまり悠々と腰を据ゑて、長談義に陥つてゐる場合があるかもしれない。それと反對に、いつもながら評傳を書く段になつて時日が切迫し、思ふやうに Barrie について論ずることの出來なかつたのは残念である。我が愛する Barrie については、いづれもう少し委しく書いてみたいと思つてゐる。

尙ほ今回も岡倉市河兩主幹が貴重な時間を割いて、この拙稿に對し懇切なる校閲を加へ、種々の有益なる注意を與へられたことを深く感謝する次第である。

昭和三年五月

澤村寅二郎

CONTENTS

INTRODUCTION

	PAGE
I. 著者評傳	i.
II. 本書解題	x.
III. BARRIE の藝術	xvi.
IV. 著作年表	xxiii.

QUALITY STREET

ACT I.	3
„ II.	23
„ III.	48
„ IV.	70

THE ADMIRABLE CRICHTON

ACT I.	93
„ II.	124
„ III.	149
„ IV.	178

MARY ROSE

ACT I.	201
„ II.	237
„ III.	260

NOTES	289
-----------------	-----

INDEX TO NOTES	443
--------------------------	-----

INTRODUCTION

I. 著者評傳

James Matthew Barrie は 1860 年五月九日 Scotland の東部 Forfarshire の Kirriemuir に生れた。Kirriemuir は小さな機織町で、楕円形の凹地に僅かな家の群り寄つた、Barrie の所謂 ‘our little red town’ である。Barrie はこれをその小説中に Thrums といふ假名で呼んでゐるが、thrum は「織絲の端」といふ意味で weaving-town といふことを代表させたのである。Barrie の生れた家は、寫眞で見ると、窓の小さな低い二階建の長屋の一角であつて、その幼時の貧さが忍ばれる。彼がその小説 *A Window in Thrums* の初めに描いてゐる家は、大體自分の幼い時の家をモデルにしたと思はれるが、さうたゞすれは随分あはら屋であつたことがわかる。彼の父は、普通の律義な愛情の深い良い父であつたらしい。Barrie は父のことを ‘a most loving husband, a man I am very proud to be able to call my father’ と言つてゐるが、その他にあまり父のことを言つてゐない。併し母に到つては、彼の書いた *Margaret Ogilvy* の一卷は、その最初の頁から最後の頁に到るまで、終始母の頌徳表であると謂つていゝ。この一卷は曾て子がその母に捧げた最も純情の籠つた貢物の一つである。さうしてこの記録によつて吾々は、Barrie を Barrie たらしめた人が、彼の母であつたことを知るのである。母は彼にさつて最も情愛に富んだ子供思ひの母であると同時に、彼の親友であり戀人であり、師匠であり批評家であつた。人が自分自身を或る一人の女性を十分に知れば誰よりも小説家たる資格を得たものであるといふことが眞たゞすれは、Barrie

は確に小説家たる資格を十分に具へてゐたといへる。Barrie は自分を知るゝ同時に彼の母を徹底的に知つてゐた。彼が生れた時、母は四十歳を越えてゐたが、彼は母の昔語りによつて過去の母を想像し得た。想像したさいふよりも現實に見たのである。彼は三十代の母二十代の母少女としての母赤ん坊としての母を見た。さうして母を通してあらゆる年齢の婦人を想像し、又女性の根本的性質を理解することが出来た。Barrie の女性に關する繊細な筆致は、母を知ることの深さから生じたものである。

母は非常に愛情に富んだ子供好きな人で、十人の子供を生んだ。Barrie はその七人目 (?) にあたる。母は自分の父を非常に崇拜してゐた。さうして母の話によつて Barrie も亦、自分の生れる九年も前に死んだその祖父のこゝさを、生きてゐる人のやうに想像した。その祖父は石工であつて、*What Every Woman Knows* の中に出て来る Alick を思はせる人物であつた、この祖父が細君を早く失つたために、Barrie の母は少女の時から、ちやうど *A Kiss for Cinderella* の Cindellera や *Peter Pan* の Wendy のやうに、かひがひしく家事一切を引受けて立派に主婦の役目を果たし、又弟の世話をしたのである。母はまた愛情に富む實際的な婦人であると同時に、甚だ intellectual な素質を具へ、非常に讀書好きであつて、洗濯の糊の出来あがる十分の暇に、Gibbon の「羅馬衰亡史」を讀んだり、書物の中に外國語が出て來るゝその意味を明かにしなければ決して承知しなかつたり、又 Barrie から Horace を原語で教へてもらつたり、誰か Barrie の友達の大學生が話しに來るゝ、母は娘の噂をして、“O matre pulchra filia pulchrior” と言つて相手を驚かししたりした。又彼女は甚だ ambitious であつて、自分が偉人傑士の母であることを空想してみたり、實際さうであることを希望したりした。従つて子供の教育には頗る熱心で、男の子には大學教育を受けさせるものゝ、初めからきめてゐた。Barrie より六七歳

年長の兄は、Barrie に劣らぬ優れた才能を具へ、また情愛の深い子であつたが、それが遊學の途中で病死したことは、母に非常な打撃を與へ、それ以來母の健康は急に衰へたさいふことである。そして當時六歳の Barrie は、さうかして母を慰めようと思ひ、押しほれてゐる母を笑はすことを一所懸命に努め、ある時はベッドの上に逆立ちをして見せて、逆さの顔を眞赤にしながら「お母さん、笑つてゐる？」と叫んだこともあつた。かやうに幼な心にも、眞剣な心持で人に愉快を與へようと思ひ、努力したことは、さかく暗い涙にしめり勝ちな世界を *humour* の光を以て明るくした Barrie の將來を面白く暗示するものである。Barrie は幼い時から母と共に手に入れ得る限りの書物を讀んだ。彼には毎月来る *Sunshine* さいふ雜誌が大變樂みであつた。ある時その來かたが遅かつたか何かして、全く讀み物に缺乏した時、ふと彼は自分で物語を書いて母を喜ばさうと思へつた。これが抑も Barrie の初めて文筆に攜(き)はるきつけとなつたのであつた。

彼が 1882 年いよいよ Edinburgh の大學を卒業して M.A. を得た時、Barrie は文筆を以て身を立てることに決心してゐた。母は必ずしも不賛成ではなかつたが、所謂文士生活の不安さいふことが、彼女の心配の種であつた。Grub Street の昔はいはずもがな、文學に志してロンドンに出た多數の青年の運命を、母は十分に知つてゐた。この際に Barrie の味方となつて彼に *inspiration* を與へた人は、その町の仕立屋であつた。その仕立屋は顔の青白い瘡せた膝の曲つた、こつこつ仕事ばかりしてゐる爺さんであつたが、Barrie が詩人の肖像を幾枚か集めてゐるを聞いて、それを見せてくれと申込んだのが縁となつて、初めて知合つたのである。仕立屋はその寫眞を仕立臺の上に載せて、ぢつと長くそれを見詰めた後、Barrie の顔にその熱心な眼を移して嚴かに、

What can I do to be for ever known,

And make the age to come my own?

(永久に知られんため、また來らん世を

我が手に收めんために、我が爲し得べき事は何ぞや)

さいふ詩人 Cowley の句を誦した。Barrie は自分の心底を見抜かれたと思つて驚いたが、豈圖らんやそれは仕立屋が彼自身文學を以て世に立たうとして、空しく陋巷に朽ちてしまつた自分の悲しい過去を回想した言葉であつたのだ。

Barrie は急いで家に歸つて、ちやうどその時隣人と茶を飲みながら話してゐた母親をわざわざ傍に引張つて行つて、突然莊重な態度で

What can I do to be for ever known,

And make the age to come my own?

と言つた。後年母はよくこの一句を懐しげに繰返した。そして「あなた自身さういふ人間になりたいのでせう」と側から言はれるさ、彼女は熱情の籠つた調子で “No, but I would be windy of being his mother” (いや寧ろさういふ人の母になりたいのだ) と言つた、さうして又その望はかなへられたのである。

Barrie は新聞の募集廣告によつて 1883 年の二月 *Nottingham Journal* の leader-writer となつた。彼が初めて新聞社へ赴任した時の様子や社内の光景は彼の小説 *When a Man's Single* の中に描かれてゐる。彼は地方の新聞記者として毎日社説を書く旁ら、ロンドンの *St. James's Gazette* に投書した。この投書こそは Barrie の立身出世の基となつたもので、彼は母から聞いた故郷の昔語りを材料にしたのである。それは *An Auld Licht Community* として 1884 年十一月の同紙に連載された。さうしてその初めて載つたロンドンの夕刊を母に送つた時、母は非常に驚き且つ心配した。彼女は何かある故郷の秘密が暴露でもしたやうに、その新聞を隣人に隠して見せず、且つそんな物語が原稿料になるかと疑つた。そし

て Barrie から、その物語の方が餘計に金になると知らされた時、そのロンドン新聞の主幹は親切な男だが、‘slightly soft’ (少々お目出たい) と考へた。

第一回の投書で略々材料も盡きたと思つてゐるところへ、その主幹即ち Frederick Greenwood 氏は、更にそれ以上の投書を要求して來たので、Nottingham に居つた Barrie は手紙を以て母に材料を送らした。母は繕ひかけの靴下を膝から押しのけて、一所懸命に頭を絞つて Barrie の姉に昔語りを書きこらしながら “But the editorman will never stand that, it's perfect blethers.” (併し主幹さんもこれには閉口するたらうよ、何しろ全くのたはこさだからね。) と言つたといふことである。

1885 年の春彼はいよいよロンドンに移つて、Fleet Street にその運命を賭するこゝとなつた。その當時の心持を、彼は後年 St. Andrews 大學總長就任の演説中に (1922 年五月) 雲の如く集つた學生を前にして述べた。彼の曰く「ロンドンの大都に吸ひこまれて、一人の知人もなく全然生活の方法を有せず、星の消え行くまで筆を動かすことの面白さ、これこそ自分の経験した最大の歡びであつた。誰かを知るといふことは、その歡びを臺なしにしたであらう。自分は土地の言葉すら知らなかつた。ベルを鳴らして靴を求める、水を註文したと思はれた。私はその水を飲んで仕事を續けた。戸棚には何も食べる物がなかつた。従つて私は食事に時間を勞費する必要がなかつた」と。彼は種々の雑誌に投書して、所謂文壇の ‘free lance’ として奮闘を續けた。當時彼は屢 “Gavin Ogilvy” といふ pen-name を用ゐてゐた。

1887 年には彼は書物としての最初の著作 *Better Dead* を發表した。これはロンドンで生計を立てようとするスコットランド作家のこさを諷刺的に取扱つた物語であるが、全く世間の注意を惹かなかつた。その次に發表したのが *Auld Licht Idylls* (1888) で、こ

れは大體以前の *St. James's Gazette* への投書を集めて、統一を與へるために少しばかり書き改めたものであるが、これによつて Barrie は一躍して文壇の寵兒となり、所謂 Kailyard 派といふ郷土小説の流行を誘ふ基となつた。續いて二つの物語 *When a Man's Single* と *An Edinburgh Eleven* を發表し、翌 1889 年かの有名な *A Window in Thrums* が現はれるに及んで、Barrie は Kipling と並び稱せられる文壇有数の新進作家となつた。この物語は再び材料を彼の故郷 Kirriemuir にまつたもので、純朴なスコットランドの機織町の生活に無限の情趣と humour を捕へたものである。1890 年には雑誌への寄稿を集めた *My Lady Nicotine*, 1891 年には初めての纏まつた小説 *The Little Minister* を發表した。この *The Little Minister* も非常な喝采を博し、後に劇化して更に評判をまつた作である。この時分から Barrie は戯曲に興味を感じ始めたので、物語や小説の方は稍々中絶するが、1896 年に再び小説に歸つて *Sentimental Tommy* を、同じ年に *Margaret Ogilvy* を、1900 年には *Tommy and Grizel* を出した。*Margaret Ogilvy* は前にも述べたやうに、母に關する逸話を述べたものであるが、一面には彼自身の傳記でもある。1902 年には、後年 *Peter Pan* として舞臺の上に大成功を博するに到つた物語の基である頗る獨創に富んだ空想的な *The Little White Bird* が現はれ、續いて 1906 年に *Peter Pan in Kensington Gardens*, 1911 年に *Peter and Wendy* が世に出た。

以上は物語又は小説の作家としての Barrie を紹介したのであるが、ちやうど 1891 年を境として彼は劇壇に活躍し始めた。今日でこそ Barrie は、小説家としてよりも劇作家としてより良く知られ、またその方面に一層不朽の名を残すたらうと信ぜられてゐるが、彼が劇に筆をとり始めた時は、もちろん彼の作は世間の非常な評判を得たにもかゝらず、心ある批評家は寧ろ彼が小説を棄てたことを惜み、その劇作家としての成功をあやぶんだのである。

Stevenson は彼を評して、「彼に天才はあるが、同時に新聞記者肌がつき纏つてゐる——そこが危険だ」と言つたのは、俗受けを求める傾向を心配したのである。Barrie を劇に専心するやうに勧めた人は、かの有名な俳優の Henry Irving と文豪 George Meredith であつた。彼が初めて劇に筆を染めたのは、Marriott Watson と共同で書いた Richard Savage を主人公とする ロマンチック な一篇 (1891 年四月) で、不成功に終つた。彼が獨力で書いた初めての劇は、當時歐洲を風靡して遂に保守的な英國の劇壇をも動かすに到つた Ibsen の代表作「幽霊」を諷刺して、それを一種の茶番狂言化した *Ibsen's Ghost* (1891 年五月) であつた。これによつて見ても、Barrie が新時代の風潮に反感を抱く、懷古的なロマンチストであることがわかるのである。同じ六月に彼は、Thackeray の小説 *Vanity Fair* を劇化した *Becky Sharp* を上演したが、この二つは何れも不成功であつた。彼が劇に於て初めて成功したのは、次に書いた *Walker, London* (1892 年) で、筋の面白味と陽氣な humour に富む純粹な昔風の light comedy で、五百回以上も興行を続け彼の當り狂言の一つとなつた。次は Conan Doyle と合作の *Jane Annie* (1893 年五月) で、Barrie 風の面白味がないわけではないが、極く短興行に終り、次の二つの興行、即ち *The Professor's Love Story* (1894 年六月) と、彼の小説の劇化された *The Little Minister* (1897 年十一月)によつて、彼は初めて劇壇に重きをなすに到つた。殊に後者は非常な大成功で、London と New York で同時に興行されたが、其後今日までにロンドンで二度程 revive されてゐる。次の *The Wedding Guest* (1900 年九月) はそれ程評判にならず、批評家の間には大分非難の聲が高かつたが、その次の二つの作は何れも盛な歓迎を受け *Quality Street* (1902 年九月) は四百五十九回、*The Admirable Crichton* (1902 年十一月) は三百二十八回興行を続け、其後今日までに双方共幾度か revive されてゐる。さうしてこ

の二つは Barrie の特色を最もよく代表する傑作である（本書解題参照）。次の *Little Mary* (1903 年九月) もこれに劣らぬ成功を得たが、1904 年十二月クリスマスのお伽劇として Duke of York 座に上演された *Peter Pan*こそ彼を世界的に有名ならしめる基となつたものであつて、爾來 *Peter Pan* のお伽劇はクリスマスに缺くことの出来ない行事の一つとなり、*Peter Pan* なる架空的人物は、Robinson Crusoe や Gulliver と等しい子供の世界の人気者となつて、その活動映畫は先年日本にも輸入されて非常な評判をこつたことは、讀者の記憶に残つてゐるであらう。このお伽劇は前にも述べた通り *The Little White Bird* を劇化したもので、*Peter Pan* といふ少年少女のあでげない夢幻的なあこがれを代表する一種の妖精が、Darling 夫妻の子供達に飛揚の術を教へ、これを引連れて Never-never-land といふ夢の國に到り、種々の冒険に遭遇し海賊を征伐なして、遂に其夢の國に迷兒となつてゐた大勢の子供達を連れて再び歸つて來るといふ筋であつて、Barrie はその兒童の心理に對する鋭い透察と溫な同情と奇抜にして豊富な獨創力を以て、あらゆる點から兒童の心を捕へて、その無邪氣な美しい空想に十分の満足を與へると同時に、俗惡な世事にあくせくする大人をして、暫く一切の現實を忘れて子供の心に歸へらせることの貴い力を具へた點で、其比を見ない傑作である。

Alice Sit-by-the-Fire (1905 年四月) は Ellen Terry に儲け役を與へて有名となり、*What Every Woman Knows* (1908 年九月) は筋の頗る奇抜な點、humour の縱横に發揮されてゐる點で著しく、その諷刺的なところは *The Admirable Crichton* に似てゐる。1913 年から Barrie は幾つかの短い輕い劇を書き出して、所謂 variety theatre 方面の觀客を征服するに到つた。中にも有名なものは *The Will* や *Pantaloons* や *The Twelve Pound Look* 等である、殊に最後の *The Twelve Pound Look* は Barrie の技巧の精粹を最も簡潔な

形に壓搾したものと謂つていゝ。其後この種の小品として歐洲戰爭に因つた四つの劇 *The Old Lady Shows her Medals*, *The New Word*, *Barbara's Wedding*, *A Well-Remembered Voice* は、何れも Barrie の優れた技巧を示してゐる。1916 年三月に上演された *A Kiss for Cinderella* は同じく戰爭に因つたもので幾分お伽劇的の興味を加味した點で、映畫にもなつて先頃日本へ輸入されたが、Barrie の作としてはそれ程優れてゐない。併しその翌年の十月に發表された *Dear Brutus* は夢幻的傾向の強い、美しい情操と幾分の諷刺を交へ、ある點で *A Midsummer-Night's Dream* を思はせる様な優れた作品であつて、批評家によつては、これを隨一の傑作に推す人もあるくらいである。この *Dear Brutus* に現はれた夢幻的傾向を一層強めて、神秘怪奇な趣を濃厚にし、同時に *The Old Lady Shows her Medals* に取扱はれたやうな野趣を *Quality Street* に見える古雅な優美さを取交ぜたものが、1920 年四月 Haymarket 座に上演された *Mary Rose* である。これは *The Admirable Crichton* などと違つて少しも諷刺を含まず、一層深い人情に訴へ、同時に劇的效果の非常に優れたものである(本書解題参照)。

尙この外に二三の作品を著はしてゐるが、以上述べたところによつて Barrie の物語と小説と劇の大體を擧げたわけである。これによつて見ると、Barrie は必ずしも多作的といふことは出来ないが、何しろ三十年以上も文壇劇界を支配して來たこととて、數々の立派な作品を残したのである。彼はその功により次第に顯榮の位置に登り、1909 年には Edinburgh 大學の LL.D. を授けられ、1913 年には Baronet に敍せられ、1919 年には St. Andrews 大學の名譽總長に擧げられ、1922 年には世界を通じてその授與者を廿四人に限られてゐる名譽ある Order of Merit を授けられたのである。彼が初めて *Nottingham Journal* に雇はれた時は、一週三ギニの手當であつたが、今日では文人として最も有福な一人で、恐らく巨

萬の富をなしたことであらう。とにかく彼は、貧苦のうちに自分を立派に育て、くれた母に、何不足のない生活をさせることの出来たことを、この上もなく喜んだに違ひない。母は他人に物を與へることを好み質素な生活に甘んじたと同時に金銭の貴さを知つてゐた。母の死後 Barrie は、母が小さな箱の中に Barrie の子供の時の寫眞と共に、初めて彼から贈つた小切手を幾枚か、小さなリボンで縛つて保存してゐるのを發見したといふことである。晩年の母を獻身的に介抱したのは Barrie の姉である。この姉は *What Every Woman Knows* の中の Maggie の様な婦人ではないかと思はれるが、彼女は自分の病氣をも顧みずに母を看病して、遂に母の死に先立つこと二日で斃れたのであつた。この姉が Barrie に與へた感化もまた大であつたやうに思はれる。Barrie は 1894 年の七月 *Walker, London* で名聲を博した女優 Mary Ansell と結婚したが、1910 年細君に對する深い思ひやりから自ら發意して彼女と離婚した。彼は自分を文壇に紹介してくれた Frederick Greenwood や自分の才能を早くから認めて鼓舞激勵してくれた Meredith や Stevenson に對して常に深い感謝を示し、Stevenson とは殊に親交があつて、母を遠く離れる心配さへなければ、Stevenson の終焉の孤島 Vailima を訪れたかもしれなかつた。又隻脚の詩人 W.E. Henley に對しては其友情を感謝すること共に、非常な敬意を抱き、屢々彼の詩を引用し、また St. Andrews 大學名譽總長就任の際のかの「勇氣」と題する演説中には、Henley を例として、その雄々しい生涯を口を極めて推賞してゐる。併し他人を推賞するまでもなく彼自身の生涯が立派な勇氣の標本であつた。今や Hardy 逝いて英國文壇に稍々寂寥を感じる時、吾々は彼の健在を祈つてやまないのである。

II. 本書解題

本書は Barrie の三つの代表作を選んだものであつて、今その各

の梗概を述べてみる。

Quality Street は、舞臺を千八百年代の初の英國の田舎の町に置き、その町の上品な人々の住む屋敷町に、Susan と Phoebe といふ姉妹があつて、姉は既に婚期を失した老嬢であるが、妹は年若く美しく才氣があつて情愛の深い娘である。その姉妹の家に屢々遊びに来る町の若い醫者に Valentine Brown といふのがあつて、Phoebe は窃に彼に戀してゐる。Brown は元氣な青年で、初めてロンドンからこの小さな町に來た時には、世間を知らぬ二人の姉妹の様子を滑稽に感じたが、やがて彼女達の純情に動かされ、殊に Phoebe が若い娘の身で華かな社交界も知らず、姉に仕へてつましやかな生活をするのに同情する。この同情は實は戀であつたのだが彼は氣がつかない。頃はナポレオン戦争時代で義勇兵の募集が始まつてゐる。Brown は母國のために一と働きしようと思つて應募し、そのことを姉妹に知らせようと思つてやつて來ると、きつと結婚の申込をしに來たものと誤解した姉妹は、大に當がはずれ、Brown はそのまゝ何も氣づかずに戦地へ赴く。是より先 Brown の勧めで姉妹が投資した會社が破産して、姉妹は殆んど無一物となつてゐるが、Phoebe はその事を Brown に知らして、憐愍の心から結婚を申込まれるのを潔しとせず、到頭明かさずにしむ。財産を失くした姉妹は私塾を開いて生計の途を講じ、Phoebe はその美しい捲毛を帽子の下に隠し、色も香もない學校教師として惡戯小僧や生意氣な少女を相手に苦勞してゐる。さうかうするうちに十年は夢と過ぎ、ナポレオン戦争は終局を告げ、その小さな町もウオタルーの戦勝祝賀に賑ひ、凱旋した軍人や町の娘達は舞踏に浮かれてゐる。Brown も凱旋して歸つて來たが、以前の吞氣な氣持で姉妹を訪れて、二人の變り果てた姿に興をさまし失望の色を覆ふことが出来ない。Phoebe は Brown の自分に對する態度があまりに情(なさけ)ないのを憤り、Brown の眞意を探らうと思つて、十